広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

つまみ細工の技法を生かし伝統工芸品から空間彩る装飾へ

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のものづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏(SOMARTA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏（AMREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

千葉県選出の匠、江戸つまみかんざし作家の藤井彩野さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

独学で伝統技法を体得 〝普段使い〟にこだわり

江戸時代から日本女性の髪を彩ってきた「江戸つまみかんざし」。今回のプロジェクトに参加した松戸市の「つまみかんざし彩野」の藤井さんは「つまみ細工を日常に」と〝普段使い〟にこだわり、ピアスやブローチなど現代に合うアイテムを次々と提案してきた注目の作家だ。

学生時代は「海外で働きたい」と語学研修や海外旅行を繰り返していた藤井さん。異国で出会った同世代の若者が自国の文化を自慢げに話せるのに「自分は何も語れなかったのが悔しかった」ことから日本文化に興味を持つようになった。

たまたま美容室で江戸つまみかんざし職人のパンフレットを読み、ワークショップに参加。一枚の絹生地が美しい花やチョウになるつまみ細工にたちまち魅了された。

さらに深く学ぼうと弟子入りを考えたが、それを認めてくれる職人は見当たらなかった。そこで、他の職人が開催するワークショップに参加し、その技法を脳裏に刻み込み、職人が製作したつまみかんざしを購入しては分解し、寸法などを研究。買うお金が足りないときは商品の写真を撮って、作り方を想像するなど苦しい日々が続いた。よりかんざしに触れるため着物屋で働く一方、フラワーアレンジメント教室で講師も務め、自らのセンスを磨いた。

2005年に作家としての活動を始めるや作品は雑誌や書籍などで注目を浴び、16年に関東経済産業局「Next Crafts Generation（ネクスト・クラフト・ジェネレーション）」の千葉県代表に選出されるなど、国内外でその才能は認められている。

一般的に「つまみかんざし」は、ハレの日に使われる装飾品だけあって華美で明るい色が多いが、藤井さんは「いつまでもかんざしだけを作っていては、この技法はなくなってしまう。日常で使えるものでなければ」と、現代女性の装いに合う、落ち着いた色合いや使いやすいアイテムを考えるようになった。

今回のプロジェクトについては「千葉県の伝統工芸品である『江戸つまみかんざし』の認知度が上がる」と、伝統技術の継承と、業界の振興を願い参加した。

商談会でプロダクトについて説明する藤井さん

エリア・コンサルティングで生駒氏（右）と

時代に合ったスタイルで技術を後世に

「江戸つまみかんざし」の技法を応用し、今回のプロジェクトで製作したのが、室内でアロマオイルの香りを楽しむためのアロマディフューザー「ｋａｍｉｎｏｋａ―紙ノ香」。つまみ細工の愛らしい花に2、3滴アロマオイルを垂らすと約1週間香りが持続するアイテムだ。

これまで、つまみ細工の技法を後世に残そうと、かんざしだけでなく、ピアスやヘアゴムなど現代女性の装いに合う商品を開発してきた藤井さん。ただ「アクセサリーは女性に贈るために男性が選ぶには難しい」と感じていた。「技術をより広めるために、もっと日常生活で使いやすいものを作りたかった」と、部屋に置き、香りで空間を楽しむための製品を考えた。

つまみ細工に使う「でんぷんのり」は水に弱いが、アロマオイルには溶けないので技術は応用できる。ただ、従来のつまみ細工は絹生地で飾りを作るが、アロマオイルを垂らすと絹生地は汚れてしまう。そこで、素材を和紙に変更した。

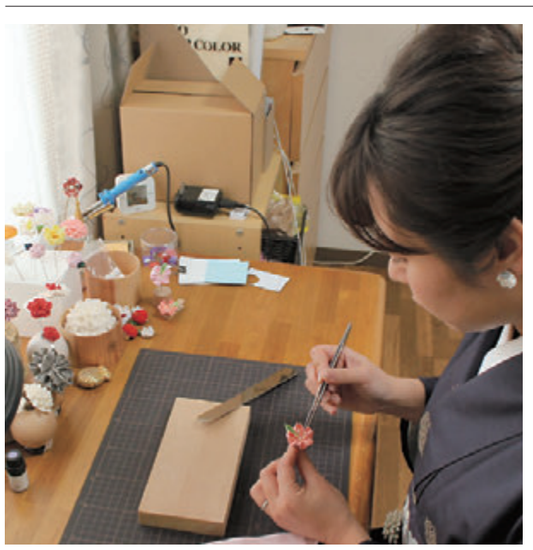
ところが、和紙は絹生地より硬く、やわらかな花びらを作ることが難しい。そこで専門店でさまざまな種類の和紙を買い占め、どうすれば柔らかな花を表現できるか試行錯誤した。

デザインは当初、大小さまざまな花をまとめた華やかな製品を考えていたが、価格がどうしても高くなってしまう。悩んでいたところ、生駒氏の「一輪（の花が）、ポンとデスクにあるとかわいいよね」の一声が「そう感じてもらえる魅力がつまみ細工にはあるんだ」という自信になり、一輪挿しに変更。

また、香りについても「〝和の香り〟があった方がよい」との生駒氏のアドバイスを受け、日本の原料と香りにこだわるアロマブランド「一十八日」と協業することになった。

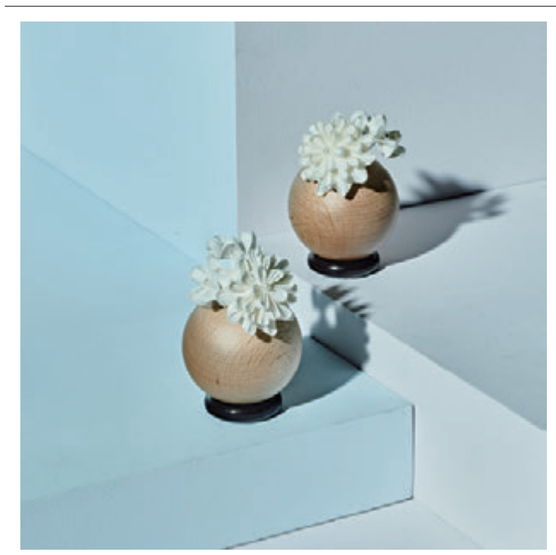
独学で技術を学んできた藤井さんにとって、プロジェクトの匠たちとの出会いは「互いに刺激し合い、自分だけでは考えられなかった見せ方を提案し合えた」という。

今回のプロジェクトでアロマディフューザーが完成したことにより「部屋や空間を飾る装飾としての、つまみ細工の可能性を感じた。今後はディスプレーやインテリアにも挑戦したい。また、技法が100年先につながるよう、時代に合ったスタイルで職人を育成していきたい」と意気込んでいる。


つまみ細工を製作する藤井さん

藤井彩野
千葉／江戸つまみ
かんざし作家

1981年、東京都港区生まれ、松戸市育ち。恵泉女学園大学人文学部卒。在学中の語学留学などで日本文化に興味を持ち、つまみかんざしの技術を習得。フラワーアレンジメント教室や着物屋での勤務経験を経て、2005年から松戸市を拠点に「つまみかんざし彩野」の屋号で作家活動を開始。2018年、千葉県指定伝統的工芸品「江戸つまみかんざし」製作者認定。


完成プロダクト「紙ノ香」

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT